

に白毛があり、他の2ヶは小さく長さ2.5mm内外、背は竜骨状にふくらんでその上に逆鈎のある白毛が束生している。雄蕊は5本、各間に仮雄蕊の突起があり花糸は基部癒合している。これはその後絶滅したが現在まだ生き残つてどこにはびこつているか筆者はよく知らないが、とにかく一時帰化したという記録をここにとどめておくことにする。幸いこの記事を眺まれた附近の同好の志によつてその後の状態が明かになればと念する次第である。和名はマルバツルノゲイトウとでも仮に名づけておくことにする。

なお阪神地方は我が国の玄関の1つでもあり戦後こうして益々外国との交通が盛んになるにしたがつて、こうした渡来植物の数も一そう増加することが予想される。これらの渡来の記録や伝葉の記録をはつきりさ

せておくことは、植物の分布速度やその他植物地理学や生態学的な研究にも興味ある資料となることを信ずる。もしこうした方面に興味をお持ちの方々があれば、郷土の地の利を十分に生かして帰化植物の調査に当られんことを切望したいものである。

〔室井云〕宇野確雄氏は当時、神戸市親和高等女学校で博物の教師として御勤めでした当時は、熱心に採集され、同税関内でクリノイガ(禾本科)と云う様な珍植物も同氏がここで見出されました。然し惜いことには今では絶滅してしまいました。同氏は戦災後、郷里、岡山県倉敷市に引上げられ、倉敷高等学校に教鞭を採り乍ら、相変らず熱心に採集に努力されています。

## 西宮地区のマイマイ属の變異

東 正 雄

昨年6月25日生物部員荒田正司君の蒐集標本から、東海、伊勢、近江、山城地区に分布しているイセノナミマイマイ *Euhadra eoa commuaisiformis* Kanamara を発見、翌日部員早川・高津・荒田をつれて、満池谷で現地調査をして、次の如き結果を知り得た。

### 1. 人工分布であると推測される根拠は

- 棲息面積が狭く凡そ30m×2mでイヌツグの密生が約30mつゞいていた。このイヌツグは30~35年以前にはなかつた由(近くの老婦人からきいた)。
- その両側斜面は主として竹藪やナツツジの老樹がよく繁茂して日陰であり、濕潤な腐植壤土で *Euhadra* の棲息には好条件であると思つた。
- 現地地の山を開墾してイヌツグを生垣に移植した時、その葉裏にイセノナミマイマイの幼貝が運びられたらしい。

### 2. ナミマイマイと混棲状態であつた

黒田博士の棲分けの法則 即ち『同一種から発したと認めらるゝ2個以上の亞種は同一地点には棲息しない』。又黒田・波部氏著『かたつむり』P.106~P.107から引用すると『……ナミマイマイとイセノナミマイマイとは棲を同じくして分布していても場所的には判然と分れている……この現象が棲分けで……これは生物界に広く見られる生態学上の重要な法則である。』

以上の法則が満池谷では全く、くつがえされた。其後11月4日鈴木章司君と荒田正司君は新甲陽(前記満池谷から凡そ2km北方)からイセノナミマイマイやナミマイマイを沢山採集された。更に驚異な事実はギユリキマイマイ *Euhadra gulicki Pilsbry* に極めて酷似する30個の *Euhadra* を発見された。解剖の結果 genital-system の様式は *gulicki* の模式産地有馬の個体に比較して多少差異を見るが殆ど一致するもの、或はイセノナミマイマイからギユリキマイマイへ推移型を思わせる様な中間型もあつた。黒田博士の『イセノナミマイマイが山へのほればギユリキマイマイ型である』との学説を裏づける事実を標本によつて判然と解決できた。ハリママイマイ *Euhadra congenita* (Smith) の分布の東限は神戸布引附近と知られていたが太田佐喜夫君によつて芦屋市親王塚町(西宮市に接近している)に棲息していることを5月15日発見された。なお親王塚町には稀にイセノナミマイマイも採集される由であつた。従つて分布の東限が西宮地区に近づきつゝある様に思つた。

以上を要約すると西宮地区には従来のナミマイマイ、クチベニマイマイの棲息圏内に東海地区からイセノナミマイマイが満池谷→新甲陽→親王塚町へと拡がりつゝある。新甲陽に分布しているイセノナミマイマイはギユリキマイマイへ推移型を示している。